

KANSAI GAIDAI UNIVERSITY

## 門田秀夫先生を追悼する

著者	谷本 栄子, 大田垣 義夫, 植田 都, 加藤 昌彦
雑誌名	関西外国語大学人権教育思想研究
巻	15
ページ	2-13
発行年	2012-03
URL	<a href="http://id.nii.ac.jp/1443/00005723/">http://id.nii.ac.jp/1443/00005723/</a>

## 門田先生のこと

谷本 栄子（関西外国語大学理事長）

先生が本学に初めて来られたときのことが、今もありありと思い出されます。昭和47年の夏のことでした。とても元気な、声の大きい先生がお見えになったからです。

「学生時代は演劇に取り組み、舞台人を目指していた」とおっしゃっていたとおり、物怖じしない、堂々とした、とても体格の立派な方でした。その後も、先生が来られているかどうか、すぐにわかったものです。

先生は当時、広島県立本郷工業高校教頭でいらっしゃいましたが、大阪市立大学の原田伴彦教授のご紹介で、本学の非常勤講師になっていただきました。大学ならびに短大部の夏、冬の集中講義で、「教育社会学」や「部落解放教育の研究」などをご担当願ったのです。

昭和62年、先生が本郷工業高校の校長を定年でおやめになるとすぐ、外国語学部の教授にお迎えしました。人権の国際化や自然環境の保全、恒久平和の実現など、21世紀は“人権の世紀”とされていて、本学も人権教育の一層の充実を図ることが求められていたからです。

先生が担当されたのは「人権教育思想論」や「人権問題論」ですが、その講義は、豊かな知識と実践に裏打ちされた鋭く、熱いものでした。大正11年3月の全国水平社宣言は、あの有名な「人の世に熱あれ、人間に光あれ」で結ばれています。先生の講義も生き方も、この言葉をほうふつとさせる、熱い、熱いものでした。

平成6年春、本学は人権教育思想研究所を設置し、初代所長を先生にお願いしました。人権教育の基礎づくりから、ステップアップまで。一徹に取り組んでいただいた先生を亡くし、誠に寂しいかぎりです。

## オーラのある先生

大田垣 義夫

(元人権教育思想研究所長)

私が門田秀夫先生にお会いしたのは、関西外国語大学短期大学部穂谷学舎に赴任した1987年4月、私が短期大学部穂谷学舎の人権委員に任ぜられ、授業が始まる前でしたが、片鉾学舎にある人権教育思想研究所を訪れたときでした。私が大阪府教育委員会社会教育課の職員として、現在は「人権博物館」になっている「人権歴史資料館」（愛称はりバティおおさか）に数年間、学芸部長として勤務していたことが共通の話題となって、初対面とは思えぬ雰囲気の中で、大学の近くのお店でご馳走になったことを鮮明に覚えています。

5月ぐらいだったか、年度最初の人権教育思想研究委員会が持たれたとき、門田先生が人権教育思想研究所の所長として、「世界人権宣言」採択50周年を迎える今、日本国内だけでなく、グローバルな視点での人権の課題について縷々語られたことを、畏敬の念を持って聞いていたのを覚えています。そして人権教育思想研究所の設立以来の懸案である研究紀要を、いよいよ本年度は発行する運びとなったので、今、広く学内に原稿募集はしているが、人権委員は必ず寄稿するよう告げられたときは、正直、戸惑いを感じました。

人権に関わる「論文」なんて書いたことがなかったし、付け焼き刃でまとめるにしては余りにも造詣がなかったからでした。苦慮の末、江戸末期から明治にかけて活躍した歌人、大田垣連月が、まるで「勤王の志士」のごとく語られる逸話が多いのに疑問を感じ、もっと人間らしい生き方をしていたのではないかと思っていたので、それをまとめてみよう、夏休みを返上して「歌に見る大田垣連月の人間観」を書き上げ、9月の締め切り日に間に合うよう提出しました。

10月の、編集委員会としての人権教育思想研究委員会で、門田所長が、提出された原稿について、1つ1つ感想を述べられたときは、針の筵に座った思いでしたが、温かいお言葉を頂き、まずはほっとしましたが、その後も号を重ね、寄稿に際して、門田先生は何もおっしゃらないのに、常に緊張する

オーラ（奥拉）のある先生でした。

2000年3月、門田先生は退職され、名誉教授になられました。そして不肖私が入権教育思想研究所の2代目所長に就任することになりました。門田先生がゼロから築き上げ、やっと軌道に乗り出した入権教育思想研究所を、学内でどう位置づけ、紀要等を通して学外にどう発信していくか、私には荷の重いポストでした。幸い門田所長の時から、入権教育思想研究所の中心的スタッフとして活躍されていた、現所長の加藤昌彦先生に随分助けて貰ったことと、名誉教授として、大学の卒業式や入学式には必ずご出席された門田先生と、夜遅くまで飲食を共にしながら語り、折に触れている人々と出会いを作っていたことが、2006年3月に私が退職するまで、何とか所長を務めることが出来た理由だと、今なお、感謝しています。

私の退職後も、植田都所長さんの時に、門田先生ご夫妻に遠路、京都まで来ていただいて懇親の場を持つことが出来たのも、今では忘れ得ぬ思い出となりました。門田秀夫先生のご冥福を祈りつつ、不思議なオーラで私を育てて下さったことに感謝申し上げます。

## 強く豪快な人生を貫かれた先生へ

植田 都

（前入権教育思想研究所長）

2011年9月1日、85歳の生涯を閉じられました。先生は、今、流行りの草食系男子とは真逆の、強く豪快な人生を貫かれたように思います。

葬儀の日も台風が中国地方を直撃の最中、激しい大雨の中で執り行われ、まさに先生の歩んで来られた人生を思わせるような最後でした。「オレは、精一杯生きた！もう逝くぞ！後は皆でよろしく！」とでもおっしゃってられるようでした。

私は先生が退職なさる事になり、「入権教育思想研究所」に入れていただいたので、先生のご研究や学生との関わりの様子は、実際に拝見させていた

だく機会はなかったのですが、唯一、著書「人権問題の歴史と教育」の中で、少し書かせていただき、共著として明石書店から出版させていただきました。それ以外は、学会や研究会、会合の場などで、力を込めて語られる先生から、そのお人柄、信念の強さを感じたり、学ばせていただくことが多々ありました。

その中のいくつかの場面が思い出されます。大阪に出て来られた時は必ず寄られる飲み屋さんがあり、5～6人でいつもご一緒させていただき、先生の語られる、出生のこと、全学連草創期のこと、早稲田大学での演劇を目指した時のことなどの話に皆で耳を傾けました。また、「人権教育研究所」ではなく、「人権教育思想研究所」でなければいけない強いこだわりを話されたり、人権への思いを熱く語られることもありました。こだわりと言えば、ビールが大好きで、飲まれるのは1つのメーカーに限られ、他は口にされなかあったり、酔われるとカラオケで「上海帰りのリル」を必ず歌われました。

強く、一本気な江戸っ子先生も、ご家庭では、頑固を貫きながらも奥様にはとても理解のあるやさしい先生でした。80歳過ぎまで、無事故を自慢にしながら車の運転が大好きで、奥様を伴ってしばしばドライブ旅行に出かけられたり、京都で「都をどり」を毎年お二人で鑑賞なさるのを楽しみにしておられました。また、広島での高校校長時代の同僚の先生方数名と加藤先生など身近な方々を毎年、年末にご自宅に招待して下さり、私も何度か参加させていただきました。その時に、門田校長の熱血ぶりを語る先生方の思い出話や、困っている生徒さんをご自宅に預かり、御夫婦でお世話をした話を奥様がなさるのを、ビールを片手に懐かしそうに目を細めて、にこにこ聞いておられる先生のお幸せそうなお姿が忘れられません。

ご著書も多く、ハードな面とソフトな面の両方を持ち合わせた人間らしい、門田先生。正直に、そして強くご自分の信念を貫き、全国同和教育研究協議会や全国大学同和教育研究協議会の会長を長年お勤め下さり、素晴らしい足跡を残して下さいました。先生が生涯をかけてご尽力下さったことは、今後の人権問題、人権教育に大きな影響となることと確信いたします。先生、お疲れ様でした。そして有難うございました。

## 門田先生のこと

加藤 昌彦

(現人権教育思想研究所長)

### 柔道

先生は後年、20数年頃からは、すっかり痩せられ、往年の筋骨たくましいお姿が偲ばれなくなったが、かつては大変な偉丈夫な方だった。その基をつくられたのは柔道と思われる。先生が柔道に打ち込まれたスタートは知らない。旧制「芝中学では柔道で頑張った。3年で初段を取り、4年で主将になった。そこに芝中の先輩の樹下信雄先生から目をつけ、同じ芝中の先輩の柴田徳次郎国士館館長のもとへ推薦された。国漢科柔道専攻というので入学した」。しかし、空襲ですべてが灰塵に帰し、福山へ帰郷されて柔道の道が断たれている。関東柔道チャンピオンになったということを聞いたことがある。

門田先生は負けず嫌いな方であった。お亡くなりになる2年前までぐらいは自動車を運転されていた。往年は追い越されるのが大嫌いで、追い越し返されていたと聞く。この負けず嫌いな性格は、柔道に打ち込まれたこととも関係していると思われる。

### 先生と原爆

門田先生が映画「ヒロシマ」に出演されたことは昨年知った。映画「ヒロシマ」は1953年に日本教職員組合によって作られたが（1955年ベルリン国際映画祭 長編映画賞受賞）、松竹が上映を自粛して配給されなかった幻の作品である。昨年、枚方市が自治体では初めて上映されたので、鑑賞させていただいた。このことを門田先生に伝え、と、「自分は憲兵役で出演した」との事であった。それを確かめるべく、もう一度、別の場所で見たが分からなかった。この作品はエキストラが約9万人という、広島为学校教員や生徒が大勢参加したもので、被爆後の状況をリアルに再現したものとしては、白眉なものと思われる。

原爆について門田先生は格別なものをもっておられた。1945年3月の東京大空襲があったりして、門田先生一家はお父さんの実家のある広島県沼隈へ

疎開された。そこへ臨時招集令状が日を前後して広島連隊区司令官と東京連隊区司令官の両方から「入隊すべし」との命令が来た。両連隊間の調整の後、8月10日に広島連隊区に入隊するよう命じられた。6日に原爆が落ち、壊滅状況になっているとの報が入ったが、騎兵だった父が「次の軍命を待て」との忠告で動けなかった。もし、入隊が8月6日以前であつたら、もし、被爆後に入市され、市内を郷里の人々を探して回っておられたら、門田先生の運命は大きく変わっていたと思われる。後年「なんか、こう、うしろめたい気が今もしてならない。」と述べておられる。

### 同和教育との出会い・吉和中学事件

先生が早稲田大学付属専門学校政治経済科を卒業されて新制に移られた。しかし、お母さんの病気のために中退されて広島に戻られた。ほどなく地元の中学校で英語の先生になられた。そして次に高校へ移られた。その翌年の1952年6月、同和教育運動で名高い吉和中学事件に教職員組合の青年部員として出会う。この事件は日本国憲法にある、すべての国民は平等である、にもかかわらず実際は、厳しい差別のもとにあった生徒の現実を知らずに、建前を話すことによって、大きな打撃を生徒に与えたものであった。運動団体の厳しい追及から当該の教員が「罷免されるかもしれない」との噂が聞こえてきた。先生は当初、「首切り反対」から始められた。その年の8月、組合の講習会に出席の要請があり出かけた。同和教育の講習会であった。先生は分からないことがたくさんあったので、どしどし質問した。講師にあとで呼ばれ、「ぜひ部落に一度入って実態を確かめて欲しい」と言われた。はじめは「高校教師の来るところではない」と拒絶された。その背景には、その部落では一人も高校へ進学していない現実があった。ようやく受け入れてもらった懇談会で、「学校の先生は、やめようと思えばやめられるが、部落の間人はやめることはできないのです」と言われた。先生は「これが、一番厳しく、私の心にこたえた。今も鮮明に、あの言葉が生きています」と後に書かれている。

### 演劇人

門田先生は自身で「大の演劇好き」と書いておられる。この出発はどこで

あるか、残念ながら聞いたことがない。早稲田大学付属専門学校政経科の3年の時、1948年5月「演劇研究部（略称早大演研）を創建。代表幹事」となっている。その10月には旗揚げ公演に「同人・竹下伸之助作・演出の創作劇『復帰』」を取り上げ、その制作を担当。大隈小講堂で上演に成功している。同月には旧制最後の学友記念祭実行委員会副委員長として、舞台関係の総責任者を務めておられる。特別公演ライトオペラ、ジャコモ・プッチーニ作曲「マダムバタフライ」を長門美保歌劇団総出演で大成功されたという。11月には「劇団民衆劇場（劇団民芸の前身）製作部の依頼で、同劇団の「山脈」（木下順二作）公演（日本橋三越劇場）の企画に参加されている。同じ頃、「東京ラジオグループ」に属し、声優として端役のアルバイト。翌1949年10月には「早大演研定期公演（大隈小講堂）で名作「日本の河童」一幕の製作と演出を担当。好評裡に」終えている。同月の新制早稲田大学、最初の大学祭でも舞台関係の総責任者を務めておられる。「前年を凌ぐ豪華な内容で、新制初の大学祭にふさわしいものとなり、大好評を博」されている。

しかし、お母さんの病気のために、1949年末、父の郷里に戻った先生は翌年10月にはNHK尾道放送劇団の創立に参加し、「声優名＝森沢秀夫として、ドラマを含め定例番組のレギュラーをつとめ」られている。1951年4月に松永高校に移られてからは、着任の翌月には松永高校演劇同好会を早速、作られている。21年間に及ぶ松高での演劇の取り組みは、先生の人生の中でも、同和教育に匹敵するほどの位置を占めたと思われる。その年の11月には同校文化祭で「地平線」（黒川敏郎）旗揚げ公演で、「生徒と共に共演して製作に当たり成功をおさめ」た。以後、翌1953年（広島県）近県演劇コンクール高校の部で最優秀賞を受賞されたのを皮切りに、「優勝歴を重ね」ておられる。自身も演出賞を受賞されている。1967年には中四国ブロック大会で最優秀賞、文部大臣奨励賞を受賞されている。

先生はこうした演劇の関係で、藝能史研究会には、1963年創設以来の会員である。

## 乱世の人・創建の人

先生は1945年4月に早稲田大学専門学校に入学し、その年に政経科の学生



委員に選ばれている。翌年には大学学生自治会執行委員、また全学連中央委員を、お母さんの病気のために、やむなく郷里に戻られるまでその任にあたった。「私学にたいする百億円国庫補助要求の国会デモ、早慶戦野球券（ヤミ売り、体育会不正事件）をめぐる全学ストライキなどのチューターを」つとめられた。

教員になられてからは1950年代の勤務評定反対運動をはじめ、日教組の運動に取り組まれた。そうした歳月の1972年に、木江高校教頭に就任の懇請があった。廊下を自転車ならぬオートバイが走っているという荒廃した学校の建て直しに、県教育委員会が高教組の幹部を通じて要請したものであった。これを受けて先生は荒れた学校を教職員と一丸となって教育を回復させた。この話は先生が幾度も話して下さった。

同じ年、門田先生に関西外国語大学から講師要請が来た。大阪市立大学の原田伴彦先生が、当時学長の谷本先生から依頼されて指名された。しかし、着任したばかりの高校は荒廃の極みであり、当初断られたが、「誰にも替える人材はいない」ということに応えられて、集中講義を引き受けられた。のち1987年から高校校長退職後、教授として教育活動をされることになる。

門田先生は1970年から1987年まで17年間、全国同和教育研究協議会の副委員長・委員長を歴任されている。イデオロギーの嵐が組織を襲った時代である。しかし、先生の広い視野と幅広い人脈と強い統率力で嵐を乗り切られた。全国同和教育研究協議会は今日も教育委員会から教育運動家を幅広く包含する全国統一体である。世界の人権教育界において、これほどの教育者組織をもっている所はない。

先生は戦後日本の荒廃の中で、演劇の世界でも、高校の同和教育でも大学の同和教育・人権教育の中でも道なきところに道を拓いてこられた。本学でも人権教育思想研究所という、全国の大学が人権問題・人権教育とネーミングする中で思想という魂を入れられた。『差別を許さない人間に育てるために』『同和教育の理論と実践』『人権教育思想論－民衆の視座から解放史と全同教運動に学ぶ』『水平社宣言 思想とその時代』など、先生の著作の題名からも、先生が考えつづけ、訴えつづけられてきたことが進み出ている。今後も先生に尋ねながら道を歩みます。

## 門田秀夫先生略年譜

- 1927年2月22日 東京に生まれる。
- 1944年(17歳)3月 芝中学を卒業。4月国士館専門学校国漢科へ入学、翌年戦災で中退。
- 1944年(17歳)9月 学徒勤労動員
- 1945年(18歳)5月～6月 前年につづく建物強制疎開。大空襲のなかを広島県沼隈郡へ疎開。
- 1945年(18歳)7月 徴兵年齢の引き下げで、第2国民兵役に編入され、兵科陸軍騎兵として登録され、本土決戦にそなえ自宅待機。東京と広島の間陸軍連隊司令部から入隊の指示。両連隊間の調整の後、8月10日に広島連隊へ入隊命令。6日広島に原爆が投下される。広島壊滅で地域からの救援隊に参加しようとするも、軍命を待てと父が制止。
- 1946年(19歳)4月 早稲田大学付属専門学校政経科入学
- 1947年(20歳)10月 早稲田大学学生自治会中央執行委員、全国学生自治会連合中央委員
- 1948年(21歳)5月 早稲田大学演劇研究部を創建し代表幹事。
- 1949年(22歳)3月 早稲田大学(付専)政治経済科卒業
- 10月 新制早稲田大学の最初の大学祭で舞台関係の総責任者。
- 12月 母の病気のため新制早稲田大学政治経済学部中退
- 1950年(23歳)2月 広島県沼隈郡田島村学校組合田島中学校教諭
- 1950年(23歳)9月 信子さんと結婚。
- 10月 NHK尾道放送劇団の創設に参加。声優として定例番組のレギュラーをつとめる。
- 1951年(24歳)4月 広島県立松永高校教諭(21年勤務)。
- 1951年(24歳)5月 松永高校に松高演劇同好会を創建。
- 1952年(25歳)1月 日教組教育研究集会で「高校教育の当面する課題」を正会員報告。1957年、1958年の教研でも報告。

- 1952年(25歳)6月 同和教育運動史上に有名な吉和中学事件と出会い、はじめて同和教育を学ぶ。
- 1953年(26歳)11月 松永高校演劇同好会が近県演劇コンクール高校の部で最優秀賞、以後、松永高校の演劇活動で顕著な活動。1967年には文部大臣奨励賞受賞。
- 1954年(27歳)5月 広島県同和教育研究協議会委員(～87年5月)
- 1957年(30歳)5月 全国同和教育研究協議会委員(～87年5月)
- 1958年(31歳)5月 広島県同和教育研究協議会副会長(～62年5月)
- 1959年(32歳)1月 日教組第9次教育研究集会の人権と民族分科会の司会者(以後3年間)講師(1962～72年)
- 1960年(33歳)5月 部落問題研究所嘱託研究員。
- 1962年(35歳)1月 広島県同和教育研究協議会事務局長(3年間)執行委員(1964～87年)
- 1967年(40歳)5月 府中事件。これ以後、広島県内各地で地区実態調査に加わる。  
福山市同和対策協議会・会長職務代理者
- 1968年(41歳) 広島県高等学校教職員組合執行委員・同和教育推進専門委員長兼任(～1971年)
- 1968年(41歳)7月 編著『差別を許さない人間に育てるために』(広島県高教組刊)
- 1969年(41歳) 広島県同和対策協議会委員。
- 1969年(41歳)4月 部落解放研究所嘱託研究員
- 1969年(42歳)6月 編著『同和教育の理論と実践』(広島県高教組刊)
- 1969年(42歳)11月 単著『現代における同和教育の本質』(東方出版)を上梓。
- 1970年(43歳)5月 全国同和教育研究協議会副委員長(1981年まで11期)。
- 1971年(44歳)10月 広島部落解放研究所理事長・所長
- 1972年(45歳)4月 広島県立本郷工業高校教頭に就任
- 1972年(45歳)4月 関西外国語大学・短期大学非常勤講師(教育社会学・部落解放教育の研究)

- 1974年(47歳)9月 単著『解放教育の原点と進路保障』(明治図書)を上梓。
- 1975年(48歳)7月 単著『続・現代における同和教育の本質』(東方出版)を上梓。
- 1975年(48歳)11月 第4回全国高等学校演劇研究大会広島大会実行委員長
- 12月 編著『広島県被差別部落の歴史』(広島部落解放研究所編・亜紀書房刊)
- 1977年(50歳)11月 編著『実践同和教育論』(広島部落解放研究所編・亜紀書房刊)
- 1978年(51歳)4月 広島県立教育センター主幹研究員。
- 1980年(53歳)4月 広島県立木江工業高校校長
- 1981年(54歳)5月 全国同和教育研究協議会委員長(1987年まで)6期。
- 1982年(55歳)4月 広島県本郷工業高等学校校長
- 1986年(59歳)5月 単著『同和教育の創造』(明石書店刊)を上梓。
- 12月 単著『新稿 同和教育における歴史学習』(広島部落解放研究所・明石書店発売)を上梓。
- 1987年(60歳)3月 本郷工業高校校長退職。退職辞令の際、県教委から訓告処分。その後功績で表彰。
- 4月 関西外国語大学外国語学部教授
- 5月 全国同和教育研究協議会顧問
- 5月 広島県高等学校演劇協議会顧問
- 11月 単著『同和教育読本』(明石書店刊)を上梓。
- 1990年(63歳)4月 単著『人権教育思想論——民衆の視座からの解放史と全同教運動に学ぶ』(明石書店刊)を上梓。
- 5月 反差別国際運動日本委員会委員(2011年度まで)
- 1992年(65歳)4月 関西外国語大学人権教育思想研究委員会委員長
- 12月 単著『水平社宣言 思想とその時代』(明石書店)を上梓。
- 1994年(67歳)3月 全国大学同和教育研究協議会副会長
- 4月 関西外国語大学人権教育思想研究所初代所長
- 1995年(68歳)4月 世界人権問題研究センター研究第2部嘱託研究員、のち

に客員研究員

- 1996年(69歳)4月 関西外国語大学国際言語学部教授兼任  
1996年(69歳)9月 単著『人権問題入門』（明石書店）を上梓。  
1999年(72歳)6月 全国大学同和教育研究協議会会長  
2000年(73歳) 3月25日 教職50年記念出版『入門人権問題——部落の歴史と教育の認識』（私家本）  
3月 教職50年を機に関西外国語大学を退職、大学5人目の名誉教授  
2001年(74歳)3月 共著『人権問題の歴史と教育——同和教育運動に学ぶ』（明石書店刊）を上梓。  
2003年(76歳)6月 単著『全国同和教育運動50年の原点に学ぶ——教育実践の道筋と分裂を克服した教育運動』（明石書店刊）  
2011年9月1日(84歳) 間質性肺炎により死去。

※なお本年譜は『人生七十古来稀なり 門田秀夫』（1997年2月刊）を参考にしました。